

家計管理・生活設計のツボ

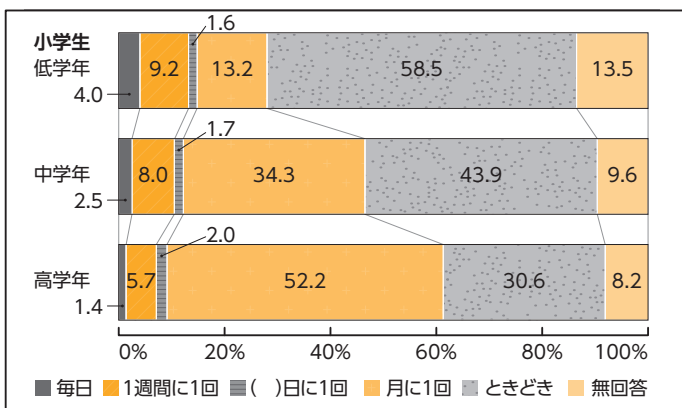
第3回

家庭でできる金銭教育 “おこづかい”

使い道を考えることで計画性や自主性を育み、ものの大切さや、働く家族への感謝の気持ちなど、子どもたちにさまざまなことを教えてくれる「おこづかい」。いつから、どのように渡せばいいのか、どんなことに気をつければいいのか考えてみましょう。

- ツボ1** おこづかいは、将来お金と上手に付き合うための“練習”
- ツボ2** 親はあまり口出しせず、決められた金額内で子どもが工夫するのを見守ること
- ツボ3** おこづかいを通して、働く家族への感謝の気持ちが芽生えるきっかけにも

■小学生のおこづかいのもらい方



■小学生のおこづかい額

		平均値	中央値
月に1回	低学年	949円	400円
	中学年	896円	500円
	高学年	1,087円	1,000円
ときどき	低学年	689円	100円
	中学年	847円	300円
	高学年	1,174円	500円

中央値は回答金額を上位から下位に並べた場合に中位(真ん中)に位置する値(出典)金融広報中央委員会「第2回 子どものくらしとお金に関する調査(平成22年度)」

「おこづかいは、いつから?いくらから?」

まだ子どもが小さい家庭の親御さんは、「いつごろからおこづかいをあげたらいいのか?」と思っているかもしれません。どのくらいの金額が適当なのかも気になるのであります。

金融広報中央委員会が行った調査によると、小学生の約8割、中学、高校生になると9割弱、つまり、日本の家庭のほとんどの子どもが「おこづかい」を貰っているようです。

ただしその実情は、家庭によっ

てまちまち。貰っている金額もバラバラですし、月単位、週単位で決まった金額を渡す「定額制」から、必要になったときにその都度渡す「都度渡し」、お手伝いなどの対価として渡す「報酬制」、小学校低学年ではあまり規則性のない「ときどき渡し」の家庭が目立つなど、渡し方もさまざまです。

その中で、「子どものため」になるおこづかいの渡し方はどのようなものなのでしょう? 例えば、定額制と報酬制のそれぞれのメリットとデメリットを次の頁にまとめてみました。いずれも一長一短があるので、それぞれの家庭に

合わせて考えるしかありません。ただ、大前提として、「おこづかい」で賄う範囲は最初にきちんと決めておきましょう。例えば学習用品は別に買ってあげるのか、おこづかいで買わせるのか、それによって渡す金額も変わってくるはずですし、そこが曖昧だと管理がしにくくなってしまいます。

親ができる渡し方の工夫は? 管理の仕方、使い方はどう教える? どう見守る?

ここで、基本に立ち返ってみましょう。

そもそも、子どもにおこづかいを渡す意義は、「大人になったときに、上手にお金とつきあえるようになるための練習をさせる」ということなのです。

大人にとっては当たり前のことですが、お金は使えばなくなってしまう。限られた金額の中で欲求をコントロールし、一定期間内でやりくりすること、計画的に貯金をすれば、欲しいものを手に入れる達成感を味わえること。反面、無駄遣いをすれば本当に欲しいものをあきらめなければいけないこと…。このようなことを、子どもは経験を通じて、学習します。子どもは目先のことに目が行きがちなので、貰ったばかりのおこづ

■おこづかいの渡し方

	定額制	報酬制
渡し方	週や月など一定期間で一定の金額を渡す	お手伝いなど子どもが働いた対価として渡す
メリット	一定金額で一定期間を賄わなければならないため、お金の管理能力が養われる	お金を稼ぐ大変さを実感でき、お金は労働の対価という考え方が育まれる
デメリット	何もしなくてもお金が手に入るため、「お金は貰えるもの」と考えてしまう	働くことすべてに値段をつけてしまい、報酬が安いまたはもらえないお手伝いなどをしなくなる

かいを瞬間に使い果たしてしまうこともあるでしょう。でも、それでスツカラカンになれば、次のおこづかい日まで、家族や友だちの誕生日プレゼントを買うことも、楽しみにしていた本や雑誌を買うこともできません。そうした中で「次は計画的におこづかいをしよう」「アレを我慢すればコレが買える」と、失敗から学んでいきます。「管理能力がないから、まだおこづかいはムリ」ではなく、管理能力を付けるために大人の目が届く年齢から、おこづかいを渡し始めることに意味がある、と考えてみるというでしょう。

そのためには、足りなくなってきたらといって、子どもにねだられるままに追加のお金を渡すのはおススメできません(ちなみに、どうしても必要なものであれば、借入金も扱いにし、次回のおこづかいから差し引くやり方を探っている家庭もあるようです)。

また、子どもに失敗をさせたくないからと、先回りしてアレコレ言うのもできればグツと我慢しましょう。金銭教育には、親御さんの忍耐力も必要とされるものなのです。

「予算感覚を身につける」「やりくり貯金箱」

では、おこづかいの使い方について、大人はどのようなサポートやアドバイスをするのが望ましいのでしょうか？

衝動買いを抑え、計画的にお金を使うヒントを提供する一例が、貯金箱や封筒などを2種類用意して、必要なもの、欲しいもの、にあらかじめおこづかいを分ける方法です。必要なものはノートや消しゴムなどの学用品、欲しいものには駄菓子やマンガ雑誌など、いわゆる娯楽品を想定します。これによって、あらかじめ予算を立てて必要なものを買えば、余ったお金で楽しむためのものを買うという感覚を、見える化して身につけることができます。

けることができます。

また、ゲームや通販など、中高生でもインターネットを介した決済をする機会がある昨今、電子マネーなどの「見えないお金」と上手につき合う訓練をすることも大切です。手持ちの現金が減らなくとも、使った金額をおこづかい帳にきちんと記入する習慣をつけさせましょう。また、最近は、保護者が利用額の上限を設定できる子ども用の電子マネーなども登場していますので、上手に活用すれば、無駄遣い防止効果が期待できます。

「お金の大切さ」を「家族で一緒に考えてみよう」

家庭でできる金銭教育はほかにあります。

例えば、おこづかいを渡すタイミングなどに、わが家は毎月何にいくらぐらい払っているのかを家族で話してみてもいいでしょう。すると、普段何気なく使っている水道や電気にもすべてお金がかかっていることに気づくことができます。

また、子どもと一緒に商店街やスーパーに行き、自分のものはおこづかいで買わせる一方で、家族の食材にどのくらいかかっているかなど(外食との差なども意識させるように)、おしゃべりしながら買い物するのもいいでしょう。

自分と同じように親も限られた収入の中でやりくりしていることがわかり、働く家族への感謝の気持ちが芽生えるきっかけにもなります。

おこづかいをきっかけに、ぜひみなさんの家庭でも、お金の大切さを子どもと一緒に考えてみてください。

◆金銭教育の第一歩、おこづかい帳の使い方

お金を計画的に使う感覚を身につけるツールとして、誰もが思い浮かぶのが「おこづかい帳」です。もらったお金、使ったお金を記録して見える化することで、無駄遣いのクセに気づいたり、予算を考えて行動するきっかけになり、上手なお金の使い方ができるようになっていきます。

ただし、子どもにとっておこづかい帳に記録し続けることは相当根気が必要なこと。買い物したらその日のうちに「おこづかい帳つけた？」と声がけするなど、習慣化するまでは大人の見守る姿勢も大切です。

また、おこづかいを渡すタイミングでおこづかい帳を親子でチェックし、使い方について反省したり、次回の使い道について話し合ったりするなど、定期的にお金について考えるきっかけ作りにも良い方法だと思います。

おこづかい帳は金融広報中央委員会のホームページ「知るほど」のURLからダウンロードして手作りすることも可能です。

● <http://www.shiruporuto.jp/tool/kozukai/kozukai/>